様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２２６７

研究課題名（和文）1970年代における美術概念の再構築に関する研究：オーラルヒストリーを中心に

研究課題名（英文）A Study on the Reconstruction of the Art Concept in the 1970s through Oral History

研究代表者
池上　裕子（Ikegami, Hiroko）

神戸大学・国際文化学研究科・准教授

研究者番号：２０５０７０５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：研究期間中、精力的に研究テーマについて調査を行い、研究ワークショップを2回行った。また、研究代表者と分担者、協力者はそれぞれオーラルヒストリーの手法を用いた聴き取り調査を行い、その書き起こしをインターネットで公開した。公開した書き起こしは3年間で合計25件となり、これが本研究課題の大きな成果として挙げられる。また、2017年に東京大学で開催した公開シンポジウム「戦後美術の群声」は150名を超える来場者があり、各パネリストの発表の後、非常に活発なディスカッションが行われ、大変有意義なものとなった。こちらも書き起こしをネット公開しており、本研究課題の成果を広く周知できたと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究課題は、1960年代の前衛美術家たちによるラディカルな活動の後、1970年代に美術概念が再構築された経緯について検証した。関係者にオーラルヒストリーの手法を用いた聴き取りを行い、3年間で合計25件の書き起こしを「日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ」のホームページで公開することが出来たのは、大きな成果である。また、2017年に開催した公開シンポジウムの書き起こしも公開しており、本研究の成果を広く社会に届けることができたと考える。

研究成果の概要（英文）：We conducted an extensive research on this topic during the period of this grant, holding a workshop twice and organizing a public symposium once. We also conducted oral history interviews with those who were involved with the research topic. Twenty-five transcripts of these interviews were published online at the website of Oral History Archives of Japanese Art, which is one of the major achievements of this study. Furthermore, our public symposium "Voices of Postwar Art" attracted more than 150 audiences, and we had a very lively discussion after panelists' presentations. The transcript of the symposium is also available at the website mentioned above, with which we were able to publicize the significance and achievement of our research.

研究分野：戦後美術

キーワード：戦後美術　日本美術　オーラルヒストリー　前衛美術　美術史　美学

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1960 年代、「前衛」を自称する美術家たちのラディカルな活動によって、伝統的な芸術概念は瓦解した。だが、前衛美術家たちが共感を抱いていた学生運動や安保運動が 1960 年代末に頓挫したことや、彼らの多くが大阪万博という国家事業に参加したことなどにより、「前衛美術」という概念は無効化したと言われる。それに代わって「現代美術」という制度が立ち現れたことは従来から指摘されていたが、どのように「美術」そのものに関する概念が再構築されたのかという視点からの研究はなかった。また、1970 年代における美術の動向については、ごく少数の展覧会を除いては（『日本の 70 年代 1968-1982』埼玉県立近代美術館、2012 年、『For a New World to Come : Experiments in Japanese Art and Photography, 1968–1979』、ヒューストン美術館、2015 年）これまで包括的に論じようとする試みがなかった。部分的に取り上げられる場合も、大衆文化や視覚文化との関連で紹介されることが多く（『あしたのジョー、の時代』練馬区立美術館、2014 年、『ディスカバー、ディスカバー・ジャパン』東京ステーションギャラリー、2014 年）、1970 年代の美術の特色は十分に明らかにされていなかった。これが本研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

本研究は、1970 年代に美術概念が再構築されていった経緯を、多様な美術の動向（絵画、彫刻、写真使用の美術、グラフィック・デザイン、パフォーマンス、集団制作、ビデオ、コンセプチュアル・アートなど）に関係する人物への聴き取り調査を行うことで明らかにすることを目的とする。まず、1970 年代の美術家たちは「前衛美術」の終焉をどのように受け止め、それ以降の時代に美術に再び取り組むことをどのように考えていたのか。また、それに伴ってどのような制作上の変化があり、「現代美術」という言葉をどのように理解していたのか。そして結果として、1960 年代と 1970 年代では「美術」に対する認識はどのように変化したのか。本研究では、「前衛美術」から「現代美術」への移行に関して生じるこうした疑問を、作家ごとに詳細な聴き取り調査を行うことで明らかにしようと考えた。次に、1970 年代の美術家は、他のメディアに関心を抱き、制作の中に取り入れることが多かった点に注目した。彼らが、どのような考えのもとに他のメディアに対する関心を抱き、どのように活用したのか、そしてその実践が主たるメディアの理解にどのような影響を与えたのかについて、聴き取り調査を行い、その際に美術と隣接領域との間に生じた多様な関係についても検討することを目的とした。

３．研究の方法

聴き取り調査は、オーラルヒストリーの方法論に基づいて行った。調査対象の生い立ちから現在までの活動を包括的に聴き取ることで、作家の生活環境、活動の時代背景、ジャンル間の差異等を明らかにすることができる。これによって、1970 年代に美術を担った美術家の活動や関心およびそれらの変化が詳らかになり、「前衛美術」から「現代美術」への移行を概念上の変化として跡づけることが可能となった。そして、作家ごとに複数のメディアに対する関心の度合いを調査することで、領域横断的なインターメディアの試みとは異なる、メディアの重層的な活用方法について明らかにした。研究計画は以下のような体制で遂行した。

池上裕子（研究代表者）が研究推進リーダーを務め、加治屋健司（研究分担者）が東日本部門責任者を、中嶋泉（研究分担者）が西日本部門責任者を務めた。東日本部門では、住友文彦（研究分担者、2017 年度からは研究協力者）、粟田大輔（研究協力者）、辻泰岳（研究協力者、2017 年度からは研究分担者）が作品調査を、足立元（研究協力者）、鏑木あづさ（研究協力者）が資料調査を担当する。西日本部門では、牧口千夏（研究分担者）、鷲田めるろ（研究協力者）が作品調査を、宮田有香（研究協力者）、細谷修平（研究協力者）が資料調査を担当した。その他、2017 年度から伊村靖子と山下晃平が研究分担者としてチームに加わった。事前調査は、分担者や協力者が所属する大学や美術館の図書館や資料室を利用して行った。代表者・分担者・協力者は連携して聴き取り調査を行い、書き起こしをインターネットで公開したうえで、それぞれ研究発表や論文執筆を行った。

４．研究成果

研究期間中、代表者と分担者、協力者は精力的に研究テーマについて調査を行い、それぞれオーラルヒストリーの手法を用いた聴き取り調査を行うとともに、その書き起こしを「日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ」のウェブサイトで公開した。聴き取りを行った主な対象は、いずれも 1970 年代に重要な活動を行った植松奎司、細江英公、畠山直哉、イチゲフミコ、ショージ・サダオ、谷川晃一、ロジャー・シモムラ、出光真子、松本路子、藤幡正樹、熊谷寿美子などが挙げられる。作家だけではなく文化行政に携わった者や画廊経営者にも聴き取りをしており、1970 年代の多様な美術実践の様相の一端が明らかにできた。公開した書き起こしは 3 年間で合計 25 件となり、本研究の大きな成果として挙げられる。こうした聴き取りを通じて、1970 年代に立ち現れた「現代美術」という制度や概念の構築と、作家ごとに異なる複数のメディアについての関心の持ち方や作品制作における取り入れ方を明らかにすることができた。

また、研究期間中に研究ワークショップを 2 回と公開シンポジウムを 1 回行った。まず、2017 年 1 月に開催した第 1 回目のワークショップ「政治史のオーラルヒストリーから学ぶ」では慶應義塾大学の清水唯一郎氏を講師に招き、オーラルヒストリーの聴き取りに関する実践的なワークショップを行った。これまで代表者や分担者が公開した聴き取りの書き起こしについても有益なコメントをいただき、本研究計画を遂行する上で大きな助けとなった。こうした経験を踏まえて 2017 年 7 月に東京大学で開催した公開シンポジウム「戦後美術の群声」には 150 名を超える来場者があり、各パネリストの発表の後、非常に活発なディスカッションが行われ、大変有意義なものとなった。こちらも書き起こしをネット公開しており、本研究課題の成果を広く周知できたと考える。さらに、2019 年 1 月に開催した第 2 回目のワークショップ「映像ワークショップ」では映像作家の細谷修平氏と福原悠介氏を講師として招き、聴き取り風景を撮影する際の実践的なワークショップを行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　　21 件）

① Hiroko IKEGAMI, Pop as Translation Strategy: Makishi Tsutomu's Political Pop in Okinawa, ArtMargins, 査読有, volume 7, no. 2, 2018, pp. 42–71
② 辻泰岳、方法としてのディスプレー：国立近代美術館の会場設計について、文化資源学、査読有、16 号、2018、pp. 53–68
③ 山下晃平、JAPAN 牛窓国際芸術祭再考：80 年代、野外美術展の変質と「美術」制度、美学、査読有、68 巻、第 1 号、2017、pp. 73–84
④ Kenji Kajiya, Japanese Art Projects in History, Field: A Journal of Socially-Engaged Art Criticism, No.7, 2017
http://field-journal.com/issue-7/japanese-art-projects-in-history
⑤ 伊村靖子、「精神生理学研究所」：メディア論としての作家表現、国立新美術館研究紀要、第 4 巻、2017、pp. 108–119
⑥ 加治屋健司、フラットベッド画面としての単色画：中原佑介の韓国現代美術論、西洋美術史学会論文集、査読有、第 45 巻、2016、pp. 25–38

〔学会発表〕（計　　25 件）

① 加治屋健司、宇佐見圭司《きずな》の廃棄と画像の再制作、国際シンポジウム「現代美術の再制作/再構築　保存修復の観点から」多摩美術大学、2019
② Hiroko IKEGAMI, Tom Max's Political Pop in US-Occupied Okinawa, College Art Association, Los Angeles Convention Center, 2018
③ 辻泰岳、夢の後始末：東京オリンピックとモントリオール万国博覧会の会場、デザイン史研究会、津田塾大学、2018
④ 山下晃平、収集の時代から、リ・サーチ（re・search）の時代へ、日本写真芸術学会シンポジウム「写真のアーカイヴについて２」、2018
⑤ 中嶋泉、1950 年代に女が描くこと−フェミニズム美術史の視座から、イメージ＆ジェンダー研究会、2017

〔図書〕（計　　19 件）

① Hiroko IKEGAMI et al, art + science weimar, Transcultural Intertwinements in East Asian Art and Culture, 1920s–1950s, 2018, 274
② Izumi Nakajima et al, University of Chicago Press, Past Disquiet: Artists, International Solidarity and Museums-in-Exile. 2018, 330
③ 牧口千夏ほか、リクシル出版、百年の《泉》―便器が芸術になるとき、2018、264
④ 山下晃平、創元社、日本国際美術展と戦後美術史：その変遷と「美術」制度を読み解く、2017、330
⑤ 池上裕子ほか、竹林舎、ニューヨーク：錯乱する都市の夢と現実、2017、502
⑥ Hiroko IKEGAMI et al, Royal College of Arts, Jasper Johns: Something Resembling Truth, 2017, 262

〔その他〕
ホームページ等
日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ
http://www.oralarthistory.org/

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：加治屋 健司
ローマ字氏名：（KAJIYA, Kenji）
所属研究機関名：東京大学
部局名：大学院総合文化研究科
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：70453214

研究分担者氏名：牧口　千夏
ローマ字氏名：（MAKIGUCHI, Chinatsu）
所属研究機関名：独立行政法人国立美術館京都国立近代美術館
部局名：学芸課
職名：主任研究員
研究者番号（8 桁）：90443465

研究分担者氏名：住友　文彦
ローマ字氏名：（SUMITOMO, Fumihiko）
所属研究機関名：東京藝術大学
部局名：大学院国際芸術創造研究科
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：20537295

研究分担者氏名：中嶋 泉
ローマ字氏名：（NAKAJIMA, Izumi）
所属研究機関名：　首都大学東京
部局名：人文科学研究科
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：30737094

研究分担者氏名：伊村　靖子
ローマ字氏名：（IMURA, Yasuko）
所属研究機関名：情報科学芸術大学院大学
部局名：　メディア表現研究科
職名：講師
研究者番号（8 桁）：60647931

研究分担者氏名：辻　泰岳
ローマ字氏名：（Tsuji, Yasutaka）
所属研究機関名：慶應義塾大学
部局名：　政策・メディア研究科
職名：特任助教
研究者番号（8 桁）：10749203

研究分担者氏名：山下　晃平
ローマ字氏名：（YAMASHITA, Kohei）
所属研究機関名：京都市立芸術大学

部局名： 美術学部・美術研究科
職名：非常勤講師
研究者番号（8 桁）：50792131

(2)研究協力者
研究協力者氏名： 粟田　大輔
ローマ字氏名：（AWATA, Daisuke）

研究協力者氏名： 足立　元
ローマ字氏名：（ADACHI, Gen）

研究協力者氏名： 鏑木　あづさ
ローマ字氏名：（KABURAGI, Azusa）

研究協力者氏名： 鷲田　めるろ
ローマ字氏名：（WASHIDA, Meruro）

研究協力者氏名： 宮田　有香
ローマ字氏名：（MIYATA, Yuuka）

研究協力者氏名： 細谷　修平
ローマ字氏名：（HOSOYA, Shuhei）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。